

それなのに思いやりがなく、とても冷たくする。そのいつかの中から瘧疾になり、村中に広がったのだ。決して女の瘧疾がうつったのではない。

女に「癒るべきだ」と強く言いました。

村人は、間違っている考え方に気づきました。

そして、女に早く「謝」ることを薬師堂に言いました。

薬師堂へ村人が近づいて来るのをみて、女はさっさと逃げ出されるおびえを感じました。

しかし、村人の話を聞いて、嬉しく涙を流しながら語りました。

「私は、旅の途中で突然瘧疾になり、とても苦しんでいました。今は、直助さんの暖かい看病をつけています。

そして、薬師如来様の教えを信じて、瘧疾を治そうと、ここから東の方向にある湯の湯田を出る地で、毎日顔と体を洗っています。みなさんも、薬師如来様にお祈りしながら、その湯で体を洗えば瘧疾が治るかもしれませんよ」

村人は薬師如来様にお祈りし、池の湯で体を洗いました。

すると、瘧疾は驚おとろくもつに治りました。

それから村人は、女を大切に看護するようになりました。

いよいよ七十七日が近づいてきたある夜の事です。女は、この瘧疾は治らないのではないかと不安(ふあん)になりました。

そして、薬師如来様に最後のお願いをしたのです。

なほ 薬師 諸病必除(しよびよつひつじよの
願(がん)なれば 身(み)より心(こころ)の 名(な)こそ置(お)かれ

(にもらい)様(さま)の教えを信じて、毎日池に通い続けたのです。もし治(な)らなければ、薬師如来様の教えなのに遺憾(げんぎん)です。こんな瘧疾でも治してください」と祈り眠りにつきました。

そして、七十七日を迎えるの真夜中に、薬師如来様が現(ま)れた。

むら雨(そめ)は だに一時(ひととき)の ものぞかし
花(はな)のかみのかた じこに捨(す)て置(お)け

「あなたの瘧疾は一時(ひととき)のものです。むら雨(そめ)は、いつまでも降り続(つ)きません。雨(あめ)が止(と)めば、花(はな)はいつか咲(さ)きます。あなたの瘧疾(めいじ)もやがて止(と)まるので、じこに捨(す)て置(お)きなさい」と言(い)われました。女は飛び起きて、両手(りょうて)を合(あ)わせました。

その時、手が震(ふる)え、顔(かお)も赤(あか)い熱(あつ)さを感じました。

女は、夜明けを待(まち)って薬師堂(やくしどう)の近くの池(いけ)に回(まわ)り顔(かお)を洗(あら)いました。

すると、とても綺麗(きれい)になりました。女は、嬉(うれ)しく目(め)に涙(なみだ)をこぼして、じつと池(いけ)にうつる顔(かお)を静(しず)かに見つめていました。

朝(あ)の霞(あ)を舞(ま)んで来た直助(なほすけ)は、とても美(うつく)しい別人(べつじん)のご様子(ごようす)の女(おんな)の姿(すがた)に驚(おどろ)き言(い)葉(は)がでませんでした。

今までに、見たこともない色白(いろしろ)の美(うつく)しい女(おんな)だったので、

美しい女(おんな)をひと見(ひとみ)もつ

たくさんの村人(むらびと)が羨(うらや)まわり女(おんな)を囲(かこ)んで

「天女(あまのむすめ)のような光(ひかり)の差(さ)す美しい女(おんな)

と驚(おどろ)きました。

女(おんな)は、薬師如来様(やくしにがはら)にとても感謝(かんしゃ)しました。

そのお礼(お礼)に、村人(むらびと)と協力(きょうりょく)して汚(きた)くなっている薬師堂(やくしどう)を直(ただ)しました。

女(おんな)は四月(しがつ)の桜(さくら)の咲(さ)く頃(ころ)に、旅(たび)を続けることになりました。

小野(おの)の村(むら)を出(で)る時(とき)、最後(さいご)に

「あなたのお名前(な)だけでも教(し)えてください」

と頼(たの)みられました。

女(おんな)は、お世話(せわ)になった感謝(かんしゃ)の返(かえ)りとして、別(わか)れを悲(かな)しみ涙(なみだ)を流(なが)しながら

「おかし、都(みやこ)の御所(ごしよ)にいた小野(おの)小町(こまち)という歌(うた)姫(ひめ)みです。

お世話(せわ)に限り(かぎり)ありかた(あ)らうございりました」

と言(い)葉(は)を残(のこ)し、東(あづま)の方(かた)向(む)に旅(たび)立(た)っていきま

